



爲儀公より故子に濱瀬を係組の事ハ一定伊豫邊  
心の奥意有べしとて伊豫を押巻あり此由大和傳  
少於系令の取對の心をせしむ一紙に託信文夫  
大光寺方より隨一れ者法友はあたふを謀りあを討ぐ  
そ首を傷ぐ大浦へ送りけむお別れありしは伊豫  
とも免され塔に木羽たれども後大和親も大浦へ  
そま移り少地をあらんを上事頼りて心懸物たりけれ  
り之史より濱瀬石の無二れの時方とありぬ此軍部  
る尾羽れも人付守ぐ濱瀬石大浦へ一味のよは松野  
村ハ大和がもよ入べしとて大光寺藏に遠るはし

とら切て汝國の涉前ハ志を通しける依り大光寺一味  
の者共甲乙と擬し坂城の少将ハ次舟は皆量したり物  
又濱瀬石ハ本村城後ハ中村ハ松野村ハ少將を將  
大光寺方の老將を悉く招き大光寺ハ一切をせんを彼  
所本が人救いありて歎けりるはるか

大光寺初度合戦の事

天正二年八月十三日大光寺ハ伊豫松野を以て進軍あり  
はなははと山出馬あり先新居尾張濱國より後結の  
勢ありしうとて各押入の勢ありぬ波急の押入あり  
濱瀬石大和ハ本村城後ハ勢を合せ難かりたる七百

餘人敗走り去りて國に於て又新谷尾崎の押入り  
葛原迄都り影出せり人々を驚かす其日城  
まゝに城守りて十日の城守りて其日城  
の四方を定めしむる事ありて其陣より榎川の  
を攻めり直に館田林の守り陣を先一の先より先井  
大隅を大將として吹浦一河田の橋の傍に難を  
九百餘人量田に有り。其次の一日も上新國但馬  
と大將として花田守國を橋元の傍に千  
餘人東根に守りて陣を直に館田林の内に  
とてられ相國の軍とて一日も大光寺城に責めんと

討られし城を滝平の元より守りて戦ひ勝ん  
たり。此の信を討取んと必死の覚むる者あり然る  
物見の者走來り河原の守りて大浦勢におん  
せん字の旗一流あり館田林の内。何れに陣を  
滝平とてその其勢に合して百餘人自身直先  
押出せり元より必死に城守りしを館田とて合  
まざるく申す所ありて其守りて陣を七からん  
を討つたれに戦ひかありて其守りて陣を  
味方殿守りて其守りて其守りて其守りて其守り  
取一文守りて其守りて其守りて其守りて其守り

龍神丹波多島國豊後境に在る古比内多志の  
人のその身命を不備と致す時、津馬深田の中へ  
飛入ると遊むる大將のほどを雨にそそぐたよお  
ちの御しりのまよはるるのまよの豊田の(向  
らぬ大洞の勢九百餘騎を合する在り遊奉り  
勢を御備うるとし(馬をわけむけのん様も  
遠平をひしめんとくを防ぎたる間、山馬を  
引返して大儀を成せたるを遊れぬと申し又  
館田林の山東方大洞の御了後の方へ備を立  
たり遊奉り勢をひしめられだ引返さんと

りし東根只一向なる新國但馬おま系伊勢あみ清  
徳卒の危をまゝ御代を合するけはの遊奉り引上  
りたる無二無三の勢御の遊奉り大声あげりし  
しに観音堂の勢をひしめたる危りしと人教を  
ひらくと引まゝの大相討を御代入んとし(遊  
中、東津方へ御了りしひしひの東光寺前より遊  
奉り又御了りし(命を惜むと致すは是れ遊  
取んと置敷は御了り押詰りし(馬は強くおと  
達者れ遊奉り終りし(討御遊奉り二時ばかりの  
間は四夜までの戦は存りし(首無しは終り

勢もあぐ心身も疲れ果つれを右京亮を討のし  
ぬの口惜中を驚ううう引返と但馬も伊勢も却  
たすとの歎もはなれぬを相討のうううの相討方  
も疲れろれを其日場戦まう敵陣有うう

再大光寺責美能を退陣事

為信公仰の借事と事とるう清原石大和の味方  
とるう大勇もれも波國及の比丘尼よとくう人  
ぞし尾侍新屋のあ人とも波國友と想んて  
我あも欲討とるまうて追討波國とも入るば  
不致して尾侍新屋の味方とあ人うううの南敵

へ逃行人共貴と相人の籠をばうりし時命と行くと討  
へううう同十二日大浦少隊陣へぬ其年も昔もあ  
極度有る家老中とされ借事とるう大光寺と波國  
よの事と元月元日はあうううう大光の月を味方  
晦日と元月祝いとく明元月と押とく高と責ん  
其用仕はれ雪深れをかじとまれあなとを器  
量も極のれと法三間柄うう長くとくう其昔  
密に相解られ晦日とくう元日祝ひ其夜子の別  
よ大浦と打ち元日祝ひ大光寺と押の四方より  
攻圍いこれも播磨騒がううう播代の時

軍人ばかり伴ひにせむ切て意味方の是とあり  
しらひにせむ入長柄の法にて実臥すのの磨  
申すの傳承の共昔千倉の仲の戦の是もたつ味方の  
兵三百人の馬あつた皆傳承とせむつ海間を走り  
有る由にせむも戦卒の思ひ切つる事なれどせむ  
退く氣をなく死ねしむを働くるされども等々の多  
勢とて且つてその傳承自由自在に城をいし傳承と  
思ひつらぬ軍なれど次見くは打死し強しと傳承と  
通なれど傳承と城(引入り)の是も播磨守刑部  
左衛門と練くまらる一先<sup>かた</sup>乞を精のい南部の方へ

此の重く運を扱ふとて是の世をなすつてお  
死とて一と傳承の死の心持しを刑部といふくもて  
くれを見よそ那うく敗軍れ将に及ぶ罪とて刑部  
が練よ傳承つり刑部が死び頼るも及ぶとてつりり  
練軍れ後よ田毛の由と著書あるの馬のたつし  
まよよ美新の由とて引運深なる事なれども是とて後  
よいよとて傳承つらめさるるも熱門を閉るを切ら  
静くしかりれと味方れ家多るるりりも我れは  
んと傳承つらるる刑部が言多し呼つらんも  
いよよあるの由つた入かへるも海を扱

唐より刑部及びして中左の元とて播磨守を  
運つぎ果只今る信をく降参の也其使とて湯家  
を中にて道公卒の勢とありて大善の御り  
志はくもあまはは詞とやうも播磨守を  
是と曰くも華れ信とていひていひていひて  
十人といひていひていひていひていひて  
刑部守を既志とていひていひていひていひて  
あつていひていひていひていひていひて  
信云へ對し勅對れ力とていひていひていひて  
あつて一命とていひていひていひていひて

運つていひていひていひていひていひて  
さやいひていひていひていひていひて  
あつていひていひていひていひていひて  
明日候とていひていひていひていひて  
りれたとていひていひていひていひて  
人教とていひていひていひていひて  
拂りもいひていひていひていひていひて  
二年正月二日の朝は太光寺の城とて退り  
年月はされし城もいひていひていひて  
いひていひていひていひていひていひて





難兵をよむ百のく後來をぞくつらむの波岡の  
城下を通るまの秘家のや有んと清瀬石大和死井  
大隅二領仰せられお合其勢も五百波名の城の  
大も弱子の門先は備を三回く其外町くまどく  
警備の足程置後一調かうらる新ひし外屋をその  
沖川の城下も石のく警備固く事改めく押通  
し山邊はまどく送らる是為信公十年たの歳の正  
月二日大光寺清く入くらる也

波岡責の事

天正六年まの比より攻らりき由基の段とらぐら

ふれりる其比波岡れ城まへ往昔速武の比自ら威  
をあらひひひく北畠源中納言秋家公の末業とて  
時の人波岡の清右衛門とぞやりり人の尊厳も後り  
邪威高くく武道を取夫ひあまふ家あひの如く  
こそぞやりのされはうや為信公波岡の城下四百  
市九日市佐野山荒木のきく隠れ居く盗博奔  
を業とする過れ者の比く其使筆くる者四五人  
を忠の若山栗山佐野初願為解重んつとく招  
かり夜よ入城下よ召りくめたりまひ其土地  
責を初められ彼あは徳とけのなとあ

或度別して馳せしめしむ女擧<sup>たて</sup>も今宵牛りし  
宣ひ若残惜りし見給へを彼も無きら形なき故を  
同其時高信公をいざよひ近日去り西の城攻め思  
事わり戦の習ふれを討死せんと仰られの彼若  
もり候ふ思入らるる下屬のいりて固志をなす  
の候方十上公の申渡す所の危しき上より能く  
討策を仰合らるるを儲七月廿日高信公  
の御先より清康系大和國安藝其勢七百石の野  
山のけづれより旌旗掲げひるりの旗ひりり  
押寄る二番は兼平中書森國金吾其勢七百石

田面と一文多し赤茶只と押向ふ二番は清康率の御  
千石百餘本道より押向らる是をさるる無きの邊者  
か人五人七八人の城の中を走り出さる浦の大海に  
と政入るる方より雲を後の如く青雲をいりて中  
の山ありぬと立替り入更らわたり駿女中幼き方  
の白備とれ先とて落駱するは彼を走廻るる  
矢倉の誰がし殺ぐと彼これ矢倉の某がし何だ  
お立ちのぎらば城の中男が只も思ひあはるる  
よく目比の名と得る兵も勇気なまじりし  
程更らげらるる車はあきれ果るばうりしかる